

# 栽培漁業技術開発事業 (ハマフエフキ)

多和田真周・藤本 裕\*・大城信弘・友利昭之助

本研究の詳細は昭和57年度栽培漁業技術開発事業(昭和58年3月)において報告したのでここでは目的と要約だけを記す。

## 1. 目 的

昭和55年度から栽培漁業センターの建設に着工し、昭和58年度から事業運営が開始される予定である。種苗生産放流対象種としてハマフエフキがあげられているがこの種は漁獲量が多く、市場価格が高いため重要魚種の一つとされている。本種の資源培養を積極的に推進するため、種苗量産技術の確立を図る。

## 2. 成果の要約

- 1) ハマフエフキの産卵状況についてみると、産卵は昭和57年2月10日から開始され、同年12月12日に終了した。通算の産卵日数は306日で、その間の産卵回数は184回を記録、冬でも水温が20℃以上になれば産卵することが示唆された。産卵量は $124 \times 10^6$ 粒で5割以上は3～5月の第1産卵盛期に産卵し、昭和56年度と同様に10～11月に第2の産卵盛期が出現した。
- 2) 小型水槽における初期飼育試験では照度が高い程良い結果となり、最底でも2,000ルクス以上は必要だと考えられた。
- 3) 初期餌料のカキ幼生投与密度試験では飼育水1mlあたり34～125個の範囲内で投与した第2回生産A区が良い結果となり、カキ幼生投与密度が高い程生残率も50%前後と高かった。
- 4) 沖出しまでの飼育結果については、第1回生産が15,600尾の取り揚げ尾数で2%の歩留り、第2回生産については60,000尾の取り揚げ尾数で5.2%の歩留りであった。
- 5) 沖出し直後に大量減耗があると推定された。
- 6) 沖出しサイズは全長10mmでも飼育可能であることが分った。

## 3. 残された問題点

- 1) 種苗量産化にむけて、カキ幼生以外の量産培養可能な超小型ワムシの開発。
- 2) 沖出し直後の大量減耗の原因究明。種苗の健苗育成と同一水槽内での30mmサイズまでの飼育技術の確立。

---

\* 現：栽培漁業センター